

## 第1回 滑川市子どもの学びのあり方検討委員会 会議録

日時：令和8年8月31日(月) 午後6時30分～

場所：滑川市役所東別館3階 中会議室

### 【委員】

| 役職                                | 氏名     | 備考 |
|-----------------------------------|--------|----|
| 富山大学 名誉教授                         | 山西 潤一  | 座長 |
| 東京学芸大学 学長補佐<br>教育インキュベーション推進機構 教授 | 荻上 健太郎 | 欠席 |
| 滑川市小学校長会 会長                       | 椎名 千里  |    |
| 滑川市中学校長会 会長                       | 山谷 大有  |    |
| 富山県立滑川高等学校 校長                     | 嶋谷 克司  |    |
| 寺家小学校学校運営協議会 委員                   | 水井 勤   |    |
| 滑川市PTA連絡協議会 会長                    | 吉田 康之  |    |
| 早月加積認定こども園 園長                     | 石倉 巧美  |    |
| 公募委員                              | 中川 彩   |    |
| 公募委員                              | 稲谷 由紀美 |    |

### 【事務局】

| 役職        | 氏名    |
|-----------|-------|
| 教育長       | 上田 良美 |
| 教育委員会事務局長 | 高倉 晋二 |
| 教育総務課長    | 石倉 博美 |
| 教育総務課長補佐  | 鎗木 知子 |
| 教育総務課長補佐  | 麻柄 浩太 |

### 会議の概要

☐教育長あいさつ

☐委嘱状交付・委員紹介

☐資料説明

☐意見交換

## 意見交換の概要

|     |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|-----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 座長  | 本日は資料説明を受けての意見交換である。本検討委員会は「学びのあり方検討委員会」であるので、滑川市の学校や学びがどうあるべきか、皆さんそれぞれの思いや「こんなのがいいんじゃないか」というアイデアを、ぜひ率直にご発言いただきたい。                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| 委員  | <p>認定こども園の立場から発言する。現在、幼稚園・保育園から小学校への「幼小接続」が大きな課題になっている。年長児から小学１年生までの２年間で国の方針に基づく「架け橋プログラム」によりスムーズな移行を図っているが、滑川市内でも地域格差があると感じている。子どもたちが自らの人生を舵取りしていく力や、自分で考えて遊びを見つけて進めていく「非認知能力」の育成は、すでに就学前の教育から始まっている。小学校・中学校の話だけでなく、その下の就学前教育からの連続性やベースとなる部分も頭の片隅に置いていただきたい。</p> <p>また、今後予定されているアンケート調査については、どのような内容を予定しているのか。</p>                                                                                            |
| 事務局 | アンケートの対象は児童生徒と保護者の両方を予定している。アンケート項目は事前に委員にも確認いただく予定としている。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| 委員  | <p>幼小接続や架け橋プログラム、その先の中学・高校・大学への接続は小学校でも非常に大切に考えている。幼稚園などで育まれた力を生かし、１年生をお客さん扱いするのではなく、年長児で頑張ってきた力をそのまま発揮してスタートできるような形を目指している。幼小の先生方が共に学ぶ研修や、教室に入りにくい子などへのサポートも含めて丁寧に進めていきたい。</p> <p>小学校で一番やっていきたいのは、子どもたちが「学びを楽しむ」ということである。教職員が連携してサポート体制を作り、子どもが自分で興味を持って探究し、試行錯誤しながら何度でもチャレンジできる場を作りたいと考えている。また、コミュニケーション力ややりぬく力、調整・協働する力といった非認知能力を授業や教育活動で育てていきたい。「知・徳・体」のバランスの取れた子を育てるためにも、学校だけでなく保護者や地域住民の皆様と連携していきたい。</p> |
| 委員  | <p>中学校はこれまで、どうしても高校進学という目的のために勉強させる側面が強かったと感じている。明日からの新学期を前に不登校の対応について学校内で話し合っていたが、学校に行くこと自体が目的ではなく、「学校で何を学ぶか」が本来の目的である。必要最低限の基礎の定着はもちろん不可欠であるが、その先の応用的な学びや多様な学びは、生徒自身が「やりたい」と選択して探究できるようになれば、学校はもっと楽しくなるはずと考えている。</p> <p>現場で感じるのは、生徒たちが「大人や先生の正解」を言うことに慣れてしまっている。校則の必要性を尋ねても大人に受け入れられる答えしか返ってこない。ルールは言われた通りに守るだけでなく自分たちで変えられること、その変え方を学ぶ場こそが学校であるべきと考えている。「なぜこうなんだろう」と自ら問い直し、意識を変えていける子どもたちを育てていきたい。</p>      |

|    |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|----|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 委員 | <p>全国学力・学習状況調査の結果を見て、滑川市の小中学生の「自己肯定感の高さ」が数字としてはっきり出ており大変驚いた。これまでの小中学校での学びや安全・安心な環境の積み重ねがこの自己肯定感の高さに繋がっており、何をするにもベースとなる滑川市の素晴らしい強みだと感じた。</p> <p>一方で、高校生の自己評価では、「自立心（自分の意志で一步踏み出す力）」が明らかに弱さを感じている。言われたことは真面目に行うが、自分から新しいことに挑む自信が持てない生徒が多く存在する。教員側にも指導したが、型にはめたる傾向があり、それが教員や生徒にとっても「安心」になっている面もある。そのような体制を変え、子どもたちが主体的に挑戦できるチャンスを高校としても作っていきたいと考えている。</p>                          |
| 委員 | <p>まず、学校の統廃合ありきではなく「学びのあり方」から議論を始めるという方針に非常に賛同している。他市町村の性急な統廃合の事例を見ると、学校がなくなることによって地域との繋がりが薄れ、地元への意識が弱まっていく懸念を感じていた。</p> <p>私自身、東京で過ごした時期もあるが、やはり「帰りたくなる滑川」という地元への愛着が根底にあった。成人式などで市長もおっしゃるように、地元を見直し、愛着を持てるような教育のあり方が大切だと思う。また、高校再編が進む中で、小中学校の段階から受験のためではなく「社会人として生き抜くための教育」を家庭や地域とともに進める必要がある。SNSやAIなどのデジタル技術についても、学校だけに任せるのではなく、大人自身もリテラシーを身につけ、子どもと一緒に学んでいく姿勢が必要だと感じている。</p> |
| 委員 | <p>資料を見て、中学校の生徒数が今後若干増える見込みであることを初めて知り、具体的な数字の把握の大切さを実感した。私自身、会社経営や現場の職人として働く中で感じているのは、実際の現場では常に大なり小なりの問題が発生し、それを日々解決していかなければならないということである。教室での教科書や難しい言葉の勉強だけでは、実際の社会に出たときの問題解決力が心配になる。しっかりコミュニケーションを取って、問題を解決していく力が何より大切である。</p> <p>海や山での自然体験（キャンプや登山など）でも、道具がなければ自分で考えて道具を作り出すような「自ら考える力」が養われる。近年の大雨や災害時にも、教室の中だけの勉強ではなく、自分で考えて生き抜く力が問われる。そうした実践的な対応力こそがこれから必要な学びなのではないか。</p>  |
| 委員 | <p>街づくりの観点からも関心を持っている。今年、娘が修学旅行へ行った際、滑川市をPRする活動を行ってきた。事前調査で知ったお店にお友達と行ってみるなど、新しい体験を重ねる姿を見て素晴らしいと感じた。自ら舵取りをする中で、自分で新しく何かをやってみたい・発表したい（プレゼンテーション等）という思いを実現できる場所をたくさん設けられれば、子どもたちも楽しみながら力を伸ばしていけると感じている。</p>                                                                                                                                                                       |
| 委員 | <p>自分自身の体験になるが、私は滑川中学校の出身で当時は7クラスあり、非常にまとまりのある学年であった。今でもクラス合同の同窓会を行うほど絆が続いている。昔は東加積小学校をはじめ各小学校から、それぞれ異なる特色や個性を持った仲間が集まり、滑川中学校で学級活動や文化祭、運動会を通じて切</p>                                                                                                                                                                                                                             |

磋琢磨していた。受験や高校時代以上に、この中学時代の体験が人生の充実した基礎になっている。滑川の各小中学校で大切に見守られて育った子どもたちは、社会に出て様々な分野で活躍する「生きる力」を備えていると感じており、男女問わず非常にたくましい。将来、県外や国外へ出て行ったとしても、いつでも懐かしく帰ってきたくするような、そんな地元であってほしいと心から願っている。

座長

OECDが提唱する「ラーニングコンパス（学びの羅針盤）」では、人生の荒波を自ら舵取りする力（エージェンシー）や、新たな価値を創り出す力、他者と協働して意見の違いを乗り越える力が重視されている。2030年からの次期学習指導要領でも「探究」が軸となり、地域や世の中の課題を子どもたちがみんなで考え、市へ提案するような実践的な学びへシフトしていく。

GIGAスクール構想で1人1台端末を配った本質は、単に端末を使うことではなく、不登校の子やギフテッドなどを含め「誰一人取り残さない個別最適な学び」を実現するためである。現在全国で約40万人いる不登校の子どもたちも、自宅や公民館などどこからでも学べる受け皿や枠組みを準備し、学校側がそれぞれの特性に合わせて柔軟に対応する時代に来ている。

教員の負担軽減（働き方改革）や国際評価（TIMSS）の観点からも、単なる知識の暗記（AIに代替される分野）から、探究活動、農林水産業・工業・商業といった実務・モノづくり、自然体験、そして地域での学び直しへと教育の価値が変化している。入試もペーパーテスト一辺倒から総合型選抜へと移行しており、知識の詰め込みではなく、体を動かしみんなで協働して課題を解決するような学校づくりを、地域全体で支えていきたいと考えている。

委員

学校から「1日当たり学年×何分」という学習時間が設定さるが、自分の家庭では1日24時間の中で睡眠時間や食事時間を最優先にし、本人の自立に任せてきた。しかし学年が上がると学習時間の管理が厳しくなり、短時間集中型の我が子は「そんなに何時間も勉強できない」と苦しみ場面があった。何時間やったかという時間管理ではなく、成果や本人の主体性をどう評価するかが大切だと思う。

座長

まさにその通りで、人にはそれぞれ異なる能力がある。平均化して穴をなくす教育から、自分の好きなことや得意なことを伸ばし背中を押してあげる教育へと社会全体が変わっていくべき。今日はいろいろな意見が出ましたが、決まった答えはない。みんなで自由に意見を出し合いながら良い学びの形を考えていきたい。

教育長

委員の皆様方から本当に良い話をいただき大変嬉しく思っている。幼児教育における「遊び込む（主体的に探究する）」体験や非認知能力の育成、学びを楽しむこと、失敗を恐れずチャレンジする気持ちの大切さを再確認した。

中学校で言われた「明日も学校に行きたいと思える学校づくり」、滑川の強みである「子どもたちの自己肯定感の高さ」を大切にしていくこと、「帰りたくなる滑川」という地元愛を育む教育など、どれも非常に心に響いた。誰一人取り残さない学びの環境づくりを目指し、今後の協議も進めてまいりたい。

本日は誠にありがとうございました。